

非協力4人ゲームにおける Nash-Stackelberg 均衡解とその計算方法

01403974 広島大学 *西崎 一郎 NISHIZAKI Ichiro
 01202665 広島大学 坂和 正敏 SAKAWA Masatoshi
 広島大学 藤田嘉宜 FUJITA Yoshinori

1. はじめに

本研究では、2人の上位意思決定者と、そのそれぞれに下位意思決定者が一人ずつ存在する2レベルの4人ゲームにおいて、それぞれの意思決定者間には協力関係はなく、下位の意思決定者は上位の決定を十分認識した後、合理的に応答する階層的意決定を行う非協力4人ゲームを考察する。とくに、非協力4人ゲームの特別な場合である4人行列ゲームを取り上げ、各プレイヤーの均衡戦略である Nash-Stackelberg 均衡解を求めるための定式化を行うとともに、Kuhn-Tucker の最適条件を適用し、遺伝的アルゴリズム (GA) を用いた均衡解の計算手法を提案する。

2. 定式化

プレイヤー1の純戦略を $\{1, \dots, k\}$, プレイヤー2の純戦略を $\{1, \dots, l\}$, プレイヤー3の純戦略を $\{1, \dots, m\}$, プレイヤー4の純戦略を $\{1, \dots, n\}$ とすれば、それぞれのプレイヤーの混合戦略は $x = (x_1, \dots, x_k)^T$, $y = (y_1, \dots, y_l)^T$, $u = (u_1, \dots, u_m)^T$, $v = (v_1, \dots, v_n)^T$ と表すことができる。ここで、 T は転置を表す。図1に4人行列ゲームの構造を示す。

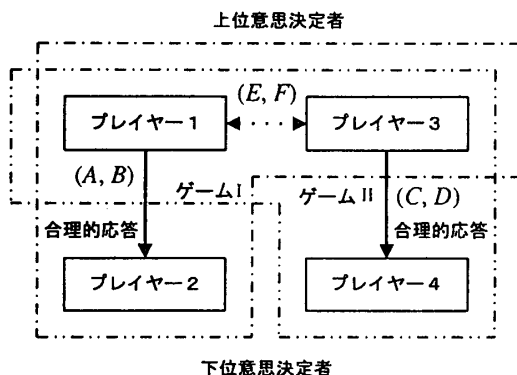


図1: 4人行列ゲームの構造

図1において、ゲームIにおけるプレイヤー1とプレイヤー2の利得行列を A, B , ゲームIIにおけるプレイ

ヤー3とプレイヤー4の利得行列を C, D , プレイヤー1とプレイヤー3の利得行列 E, F とする。このとき、非協力4人行列ゲームは、次のように定式化され、これらの問題の最適解を Nash-Stackelberg 均衡解と呼ぶ。

$$\left. \begin{array}{l} \text{ゲーム I: maximize } x^T A y + x^T E u \\ \text{subject to } e_x^T x - 1 = 0 \\ x \geq 0 \\ \text{maximize } x^T B y \\ \text{subject to } e_y^T y - 1 = 0 \\ y \geq 0 \end{array} \right\} (1)$$

$$\left. \begin{array}{l} \text{ゲーム II: maximize } u^T C v + x^T F u \\ \text{subject to } e_u^T u - 1 = 0 \\ u \geq 0 \\ \text{maximize } u^T D v \\ \text{subject to } e_v^T v - 1 = 0 \\ v \geq 0 \end{array} \right\} (2)$$

ここで、 e_x, e_y, e_u, e_v はそれぞれすべての要素が1である k 次元, l 次元, m 次元, n 次元列ベクトルである。また、利得行列 A, B, C, D, E, F は、それぞれ $(k \times l)$, $(k \times l)$, $(m \times n)$, $(m \times n)$, $(k \times m)$, $(k \times m)$ 行列であり、全ての要素が非負とする。

3. 必要条件式

(1)と(2)の最大化問題に Kuhn-Tucker 条件を適用することで、Nash-Stackelberg 均衡解の必要条件式を導出する。まず、(1)の下位レベルの最大化問題に Kuhn-Tucker 条件を適用すると、ゲームI (1)は、

$$\left. \begin{array}{l} \text{maximize } x^T A y + x^T E u \\ \text{subject to } e_x^T x - 1 = 0 \\ x \geq 0 \\ B^T x - (x^T B y) e_y \leq 0 \\ e_y^T y - 1 = 0 \\ y \geq 0 \end{array} \right\} (3)$$

となる。さらに、もう一度、Kuhn-Tucker 条件を適用すると、ゲーム I に関して、必要条件式

$$\left. \begin{aligned} -Ay - E^T u + \lambda_1 e_x - \lambda_2 + B\lambda_3 + \lambda_5 B y &= 0 \\ -A^T x + \lambda_4 e_y + \lambda_5 B^T x - \lambda_6 &= 0 \\ e_x^T x - 1 &= 0 \\ B^T x - (x^T B y) e_y &\leq 0 \\ e_y^T y - 1 &= 0 \\ -\lambda_2^T x + \lambda_3^T (B^T x - (x^T B y) e_y) - \lambda_6^T y &= 0 \\ x \geq 0, y \geq 0 \\ \lambda_2 \geq 0, \lambda_3 \geq 0, \lambda_6 \geq 0 \end{aligned} \right\} \quad (4)$$

が得られる。ここで、 $\lambda_1, \lambda_2, \lambda_3, \lambda_4, \lambda_5, \lambda_6$ はラグランジュ乗数である。同様に、ゲーム II に関して必要条件式

$$\left. \begin{aligned} -Cv - F^T x + \mu_1 e_u - \mu_2 + D\mu_3 + \mu_5 Dv &= 0 \\ -C^T u + \mu_4 e_v + \mu_5 D^T u - \mu_6 &= 0 \\ e_u^T u - 1 &= 0 \\ D^T u - (u^T Dv) e_v &\leq 0 \\ e_v^T v - 1 &= 0 \\ -\mu_2^T u + \mu_3^T (D^T u - (u^T Dv) e_v) - \mu_6^T v &= 0 \\ u \geq 0, v \geq 0 \\ \mu_2 \geq 0, \mu_3 \geq 0, \mu_6 \geq 0 \end{aligned} \right\} \quad (5)$$

が得られる。ここで、 $\mu_1, \mu_2, \mu_3, \mu_4, \mu_5, \mu_6$ はラグランジュ乗数である。

したがって、 (x, y, u, v) が非協力 4 人行列ゲームの Nash-Stackelberg 均衡解であるための必要条件は、(4) と (5) を同時に満たすことである。しかし、ゲーム I を単一レベル問題に置き換えた最大化問題 (3) は凸計画問題ではないため、得られた条件式 (4) と (5) は、十分条件とはならない。このため、Nash-Stackelberg 均衡解を求めるには、まず、必要条件を満たす (x, y, u, v) を求め、それが均衡条件を満たすことを確かめなければならない。本研究では、Nash-Stackelberg 均衡解を求める手法として、次に述べる GA を適用する。

4. 遺伝的アルゴリズム (GA)

GA における適合度関数を定義するために、次のような 2 段階の評価を行う。まず、与えられた個体 $S = (x, y, u, v)$ において、必要条件式 (4) と (5) に、非負の人為変数 $z_1, z_2, z_3, z_4, z_5, z_6$ を導入し、次の最小化線形計画問題を定式化する。

$$\left. \begin{aligned} \text{minimize } w &= z_1^T e_x + z_2^T e_y + z_3 + z_4^T e_u \\ &\quad + z_5^T e_v + z_6 \\ \text{subject to } -Ay - E^T u + \lambda_1 e_x - \lambda_2 + B\lambda_3 \\ &\quad + \lambda_5 B y + z_1 = 0 \\ -A^T x + \lambda_4 e_y + \lambda_5 B^T x \\ &\quad - \lambda_6 + z_2 = 0 \\ -\lambda_2^T x + \lambda_3^T (B^T x - (x^T B y) e_y) \\ &\quad - \lambda_6^T y + z_3 = 0 \\ -Cv - F^T x + \mu_1 e_u - \mu_2 + D\mu_3 \\ &\quad + \mu_5 Dv + z_4 = 0 \\ -C^T u + \mu_4 e_v + \mu_5 D^T u \\ &\quad - \mu_6 + z_5 = 0 \\ -\mu_2^T u + \mu_3^T (D^T u - (u^T Dv) e_v) \\ &\quad - \mu_6^T v + z_6 = 0 \\ \lambda_2, \lambda_3, \lambda_6, \mu_2, \mu_3, \mu_6 &\geq 0 \\ z_1, z_2, z_3, z_4, z_5, z_6 &\geq 0 \end{aligned} \right\} \quad (6)$$

最小化問題 (6) は (x, y, u, v) をパラメータとして固定すれば、線形計画問題となる。問題 (6) の目的関数値 w が 0 になれば、個体 S は必要条件式 (4) と (5) を満足することになる。

さらに、均衡解の十分性を判定するために、問題 (6) での目的関数値 w が 0 の個体 $S^* = (x^*, y^*, u^*, v^*)$ に対して、 $u = u^*$ とした問題 (3) を解き、最適解が (x^*, y^*) となり、同様にゲーム II に対応する問題の最適解が (u^*, v^*) となれば、個体 S^* は Nash-Stackelberg 均衡解となる。問題 (3) を解くことに関しても同様に GA を適用して

$$w_1 = \max_{x, y} (x^T A y + x^T E u^*) - (x^{*T} A y^* + x^{*T} E u^*) \quad (7)$$

$$w_2 = \max_{u, v} (u^T C v + x^{*T} F u) - (u^{*T} C v^* + x^{*T} F u^*) \quad (8)$$

を計算する。問題 (6) における目的関数値 w と、(7) で得られるゲーム I における最大値との差 w_1 と、(8) で得られるゲーム II における最大値との差 w_2 を求め、 w, w_1, w_2 を個体 S の適合度関数に用いる。 w, w_1, w_2 の値が小さい程よい個体なので、個体 S の適合度関数 $f(S)$ を次のように定義する。

$$f(S) = \begin{cases} 1/(w_1 + w_2 + 1), & w = 0 \\ 1/(100(w + 1)), & w \neq 0 \end{cases} \quad (9)$$

さらに、スケーリングとシェアリングを導入することによって、均衡解を探索する。